

正 信 念 仏 偈 28

■道綽讚①

**道綽決聖道難証
唯明淨土可通入
万善自力貶勤修
円満徳号勸専称**

道綽、聖道の証しがたきことを決して、
ただ浄土の通入すべきことを明かす。
万善の自力、勤修を貶す。
円満の徳号、専称を勧む。

現代語訳

道綽禅師は、聖道門の教えによってさとりのは難しく、浄土門の教えによってのみさとりに至ることができることを明らかにされた。
自力の行はいくら修めても劣っているとして、ひとすじにあらゆる功德をそなえた名号を称えることをお勧めになる。

~~~~~

### ■第4祖・道綽禅師

AC.562～645（84歳往生）

・曇鸞大師示寂後、20年後（聖徳太子 574～622）

☆道綽教学の背景 = 末法思想への意識

三時思想・・・正法、像法、末法

⇒ 仏教の歴史観（釈尊滅後、仏教が徐々に衰退していくという思想）



|                 | 教 | 行 | 証 |
|-----------------|---|---|---|
| 正法（釈尊滅後 500 年）  | ○ | ○ | ○ |
| 像法（その後 1000 年）  | ○ | ○ | × |
| 末法（その後 10000 年） | ○ | × | × |
| 法滅（その後）         | × | × | × |

『安楽集』第六大門（『註釈版〈七祖篇〉』・271頁）

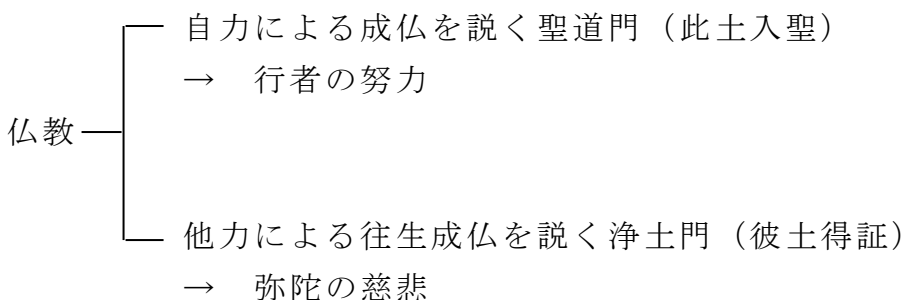
第三に経の住滅を弁ずとは、いはく、「釈迦牟尼仏一代、正法五百年、像法一千年、末法一万年には、衆生減じ尽き、諸経ことごとく滅す。如来痛焼の衆生を悲哀して、ことにこの経を留めて止住すること百年ならん」（大経・下意）と。この文をもつて証す。

→ 末法元年 = 552年

道綽禅師の教えは、自身が生まれた末法という時代と、機根の仏道を歩む上の能力が強く意識される中で醸成されていく。（約時被機）

聖道門・・・此土入聖

浄土門・・・彼土得証



法然聖人「浄土宗大意」

聖道門の修行は、智慧をきわめて生死をはなれ、浄土門の修行は、愚痴にかへりて極楽にむまる。

『親鸞聖人御消息』第六通（『註釈版』・771頁）

故法然聖人は、「浄土宗の人は愚者になりて往生す」と候ひし

（今は亡き法然上人が、「浄土の教えを仰ぐ人は、わが身の愚かさに気づいて往生するのである」と仰せになっていたのを確かにお聞きしました）

『安楽集』第三大門（『註釈版〈七祖篇〉』・241頁）

一切衆生みな仏性あり。遠劫よりこのかた多仏に値ひたてまつるべし。何によりてか、いまに至るまで、なほみづから生死に輪廻して火宅を出でざる。答へていはく、大乘の聖教によるに、まことに二種の勝法を得て、もつて生死を排はざるによる。ここをもつて火宅を出でず。何者をか二となす。一にはいはく聖道、二にはいはく往生浄土なり。その聖道の一種は、今の時証しがたし。一には大聖（釈尊）を去ること遙遠なるによる。二には理は深く解は微なるによる。このゆゑに『大集月蔵経』（意）にのたまはく、「わが末法の時のうちに、億々の衆生、行を起し道を修すれども、いまだ一人として得るものあらず」と。当今は末法にして、現にこれ五濁悪世なり。ただ浄土の一門のみありて、通入すべき路なり。このゆゑに『大経』にのたまはく、「もし衆生ありて、たとひ一生悪を造れども、命終の時に臨みて、十念相續してわが名字を称せんに、もし生ぜずは正覚を取らじ」と。

⇒ 二由一証

① 大聖釈尊が亡くなり、時は末法に至っている。（時代）

② 聖道門の教理は奥深く、機（き）の能力は甚だ微弱である。（機根）・・・二由

※『大集経』「月蔵分」の文より聖道門の難証を示される。・・・一証

法然聖人『選択集』「二門章」（『註釈版〈七祖篇〉』・1183頁）

道綽禪師、聖道・浄土の二門を立てて、聖道を捨ててまさしく浄土に帰する文。

『安楽集』の上には、…《中略》…。いまこの浄土宗は、もし道綽禪師の意によれば、二門を立てて一切を撰す。いはゆる聖道門・浄土門これなり。

⇒ 日本における浄土宗一宗独立の根拠となる文。

⇒ 龍樹菩薩（難易二道）→曇鸞大師（自力他力）→道綽禪師（聖浄二門）

・・・自力聖道門ではなく、他力浄土門に帰することを勧めるのが七祖の伝統。

### ☆約時被機（時代と機根に適応した教え）

『安楽集』第一大門（『註釈版〈七祖篇〉』・182頁）

第一大門のなか、教興の所由を明かして、時に約し機に被らしめて勧めて浄土に帰せしむとは、もし教、時機に赴けば、修しやすく悟りやすし。もし機と教と時と乖けば、修しがたく入りがたし。

⇒自らの仏道を選ぶにあたっては、時代と根機（仏道を歩むにあたっての能力）をふまえるべきである。いかに優れた教えであっても、時代と根機に適合していなければその仏道を歩むことは困難。

⇒時代に関する考察は曇鸞大師に見られない、道綽禪師の教えの特色。

⇒『涅槃経』の学問的研究 → 慧瓚<sup>えさん</sup>教団での実践的修行 → 浄土門（鈍根の凡夫が救われる道）

### ○「万善自力勤修 円満徳号勸専称」

#### 称名念仏の勧め

『安楽集』第一大門（『註釈版〈七祖篇〉』・188頁）

第四に次に諸経の宗旨の不同を弁ずとは、もし『涅槃経』によれば仏性を宗となす。もし『維摩経』によれば不可思議解脱を宗となす。もし「般若経」によれば空慧を宗となす。もし『大集経』によれば陀羅尼を宗となす。いまこの『観経』は観仏三昧をもつて宗となす。もし所観を論ずれば依正二報に過ぎず。

⇒ 念観両宗（称名念仏・観相念仏）

『安楽集』第一大門（『註釈版〈七祖篇〉』・184頁）

いまの時の衆生を計るに、すなはち仏世を去りたまひて後の第四の五百年に当れり。まさしくこれ懺悔し福を修し、仏の名号を称すべき時なり。もし一念阿弥陀仏を称すれば、すなはちよく八十億劫の生死の罪を除却す。一念すでにしかなり。いはんや常念を修せんをや。

⇒ 善導大師による称名念仏一行の純化へ。

令和5年 3月12日 信行寺仏教入門講座

『教行信証』「行文類」（『註釈版』・141頁）

この行はすなはちこれもろもろの善法を撰し、もろもろの徳本を具せり。極速円満す、真如一実の功德宝海なり。ゆゑに大行と名づく。しかるにこの行は大悲の願（第十七願）より出でたり。

⇒ 円満徳号の専称（勸）

⇒ あらゆる善根功德を満たした「南無阿弥陀仏」の名号

『一念多念文意』（『註釈版』・692頁）

「功德」と申すは名号なり、「大宝海」はよろづの善根功德満ちきはまるを海にたとへたまふ。この功德をよく信ずるひとのこころのうちに、すみやかに疾く満ちたりぬとしらしめんとなり。しかれば、金剛心のひとは、しらずもとめざるに、功德の大宝その身にみちみつがゆゑに大宝海とたとへたるなり。

【MEMO】